

## 儀八丸回想

伊東静雄（静岡県沼津市 八十六歳）

戦前、私の家は狩野川河畔にあり、対岸に魚河岸があった。河口から二百メートル上流で早朝から活気と喧騒に溢れていた。少年の頃、夏の遊び場はこの狩野川べりをおいて他になかったといっている。ここで水練の技を磨き、ハゼやボラっ子とたわむれ、潮の満ち干きの不思議に首を傾げた。

中でも忘れ得ぬ夏休み中のこの思い出。

イワシやサバを掴みとり、母に売って？ 小遣を稼ぎ、増田屋のきんつばに換えたことだ。エッ、川で海の魚を……と不審に思われるだろうがネタを明かせば成程と納得がいく。

川遊びに興じている子ども等に、魚を満載して魚河岸へ向かう漁船の乗組員が「そーれ」と投げってくれるものだ。バケツを抱えてこのチャンスを待っていた我々は早い者勝ちの争奪戦を展開する。何よりも泳力がモノをいう場面だ。

河口の松原越しに大漁旗をひるがえし、エンジン音

れたものだから容易に掴まえたが、これがナナツ何と五十センチもあろうかというカツオだった。

カツオの旬は初夏だが盛漁期は真夏の頃である。たっぷり脂ののった見事な魚体を抱えて一目散に帰宅した。胸が高鳴っていた。母は「うわわわ、あらあら」と目を睨いた。

夕餉に家族七人（祖父母・父母・弟妹）で舌鼓をうった。父が腕をふるった刺身で箸にとって醤油につけるとジワツと脂がひろがっていく。食事中、ベチャクチャしゃべると「黙って食え！」と父に叱られるから誰も「旨い」と言わないが表情で堪能しているのはわかる。改めてエイジさんに感謝した。

そしてエイジさんとの因縁はこれだけで終わらなかつた。十六年後、実に思いもよらぬ再会が待っていたのである――。

後年、私は教職に就いた。二番目の赴任校は静岡西小学校である。漁船団が母港としていた狐師町にその学校はあった。

三学年担任。児童の中に菊場哲太郎君がいた。ヤンチャだが頭のいい子だった。

家庭訪問で菊場家を訪ねた時のこと。入母屋造りの邸宅の表札に『菊場栄治』とある。（栄治・エイジ・

を響かせて漁船はやってくる。「きたぞー！」と色めきたつ子供達。航路は決まっているからそこを避け、立ち泳ぎで待つ。心躍るこの瞬間は今も臍が覚えている。船名も脳裏にくっきり刻まれたままだ。竜丸・津島丸・勘介丸・そして儀八丸。儀八丸をさいごに挙げ（そして）と特別扱いにしたのはこの船との関わりが最も濃厚だったからだ。いずれの船も地元の静岡港を母港とする中型船で乗組員は七、八名か。駿河湾内を主な漁場としていた。

――ある日。

儀八丸の右舷側で待ちうけ「おじちゃん、魚ちようだーい」と叫ぶと年輩の漁師が「エイジ、お前を呼んでるぞ」と若い乗組員に声をかけた。それでこの逞しい若者の名がエイジと知り、以後この漁船員を見ると「エイジさん」とひとときわ大声で呼びかけた。

この時は「おう、そのポーズにオレの贈り物だア」と大きな魚を投げたではないか。私をめぐけてく

ん？ まさか……）

夫妻で迎えてくれ客間へ通されてふと長押ながしに掲額されている漁船の写真をみてびっくり仰天。あの懐かしの儀八丸ではないか。もしや、と思つて尋ねるとやっぱりわが？ 儀八丸。菊場栄治さんはあの時カツオをくれた若者。よく見ればかすかに面影はある。

船名の由来は栄治さんの父親の名前だそう。故菊場儀八。昭和初期にこの船を造り、船主だったという。私はこの奇遇に興奮し、哲太郎君の話はそっちのけにして栄治さんと懐旧談に耽った。

やがて暇を告げて腰をあげると、栄治さんが、「先生、ちよつと待った」と手で制し、奥様に言った。

「ゆんべ（昨夜釣ってきたアレ、アレ持ってきて）と指示。奥様がニコく顔で手にしてきたのは目の下三センチの立派な黒鯛だ。

家へ持ち帰ると当時新婚ホヤクの妻は、「すつごーい。あなたさばけるの？」と問うから腕まくりして三枚におろし、片身は刺身にもう片方は切身にしてみせた覚えがある。アラは味噌汁のダシに。実に美味だった。

また食糧事情は贅沢を許さなかつた時代の（おいしい記憶）である。